

夕張国際学生映画祭

熊谷 博子

東京新聞 夕刊コラム『放射線』（現・『紙つぶて』） 2007年2月19日

その学生たちと会ったのは、「三池と夕張から日本を掘る」というシンポジウムの場だ。昨年秋、私の作ったドキュメンタリー映画『三池 終わらない炭鉱（やま）の物語』、東京の再アンコール上映初日だった。三池炭鉱のあった大牟田と夕張からもゲストを呼び、炭鉱に思いをよせる人々が集まり、語りあった。

その場で「夕張国際学生映画祭をするので、ぜひこれを上映したい」と言われた。彼らは映画祭を学生たちの手で、地元の人と一緒に作り上げていくことが大切だと感じたようだ。

私自身も夕張で、この映画の小さな試写会をしたことがある。住民・自治体・スタッフが協力し、“負の遺産”とも言われたまちの歴史を“宝物”にする意図で作った映画で、観てもらえばきっと元気になる、と思ったからだ。

初めて現地に行き、報道が間違っていると感じた。いつも市の無駄遣いの象徴として出される石炭の歴史村。問題なのは観覧車の目立つ遊園地で、主要な石炭博物館ではない。ここには誰でも地下深く入れる本物の坑道がある。必死に働き働いた人々の息づかいが聞こえ、歴史と生活を触ることができる大切な場所だ。まちの再生に財政は必要だが、住む人々がまちの歴史にどれだけ誇りを持てるかが、何より大事だと思う。

3日間続くこの映画祭を成功させようと、今、札幌と東京事務局の学生たちが必死に走りまわっている。100人を超すボランティアが集まり始めた。

海外の学生たちの映画も上映するが、『三池』の上映は2日目の今月27日だ。外の人間と中の人間が協力して何ができるのか、市民と学生たちともに、真剣に語り考えたい。熱い思いの人、どうぞ集まって下さい。